

## フラス1

シンポジウムでは「持続可能性」というものがテーマになった。人口減少が進む中で自治体はどう持続させていくべきかというのは北海道自治体学会が継続して取り上げてきたテーマである。1990年代、各自治体はテーマパーク等の観光地を作り、観光客を誘致することで地域の持続可能性を計ってきたが、逆に夕張市のように財政悪化が進んだ例も多い。そこで今日、過疎地の持続可能性を追求するアプローチの一つとして、既存の地域施設などをアニメや漫画などで取り上げてもらうことで、観光地として「発見」され、持続的に観光客が訪ねてくる地域にしようという事例が増えている。この新たな地域の持続可能性のアプローチとして注目される「コンテンツツーリズム」について、慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員である菊地映輝氏に投稿をお願いした。

## コンテンツツーリズムの持続可能性を考える

慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員 菊地 映輝氏  
([eiki.g.kikuchi@gmail.com](mailto:eiki.g.kikuchi@gmail.com))

最初に私事を語らせていただくと、80年代の終わりに札幌で生まれてから、大学進学に伴い本州に旅立つまで、ずっと北海道内で育ってきた。80年代の終りと言えばバブル景気の真っ只中である。その頃、北海道では観光ブームを背景に大規模なリゾート開発が進んでいた。しかし、バブル崩壊に伴い開発計画の頓挫や経営破綻が相次ぎ、最終的にはリゾート開発を下支えしていた北海道拓殖銀行の破綻という結末を迎えた。

ところで、北海道自治体学会の本年度シンポジウムのキーワードは「持続可能性」だと伺った。その上で、筆者に原稿執筆の打診が来たのは、筆者が研究するコンテンツツーリズムの領域に観光分野の持続可能性のヒントがあると期待されてなのだ理解している。つまり、前述のバブル期における後先考えない開発による観光地創造ではなく、既にある場所がコンテンツによって観光地としての価値が見出されていくというコンテンツツーリズムの営みには、どこか持続可能性が見いだせるのではないかということだろう。

ここではコンテンツツーリズムとは「地域に関わるコンテンツ（映画、テレビドラマ、小説、まんが、ゲームなど）を活用して、観光と関連産業の振興を図ることを意図したツーリズム」のことを指す。近年はアニメ作品の舞台や背景となった場所をファンたちが訪れる「アニメ聖地巡礼」の流行もあり、コンテンツツーリズムは近年社会的な注目を集めている。

しかし、上記のコンテンツツーリズムの定義を見れば、北海道ではかなり昔の段階でコンテンツツーリズム現象が見られていたことに気づく。ドラマ『北の国から』（1981～2002年）とその舞台になった富良野市や、映画『幸福の黄色いハンカチ』（1977年）と映画後半の舞台である夕張市の関係はまさにコンテンツツーリズムなのである。これらのドラマや映画の舞台には、コンテンツのファンたちが観光地として訪れていたことは多くの人々が

© 国土交通省総合政策局観光地域振興課・経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課・文化庁文化芸術文化課（2005）『映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査』の P.49 より。

知るところである。また、北海道民には今ひとつ知られていない印象を受けるが、中国映画『狙った恋の落とし方。』（2008年）は、厚岸町や釧路市などの北海道東部エリアが物語の主たる舞台となっており、映画公開後には多くの中国人観光客が道東を訪れている。さらに『WORKING!!』（2010）や『銀の匙 Silver Spoon』（2013）などのアニメ作品の舞台にも北海道はなっており、今日のコンテンツツーリズムの主流であるアニメ聖地巡礼も北海道で行われている。事例を挙げればきりが無いが、このように北海道ではコンテンツツーリズムという言葉が流行する前から現象としてのコンテンツツーリズムは見られていた。

そうした事例の多くを見たときに得られる教訓は、「コンテンツツーリズムは永続的には持続しない」ということである。一般的に、そのコンテンツが登場してから月日が立つほど、コンテンツツーリズムを行う観光客の数は減少していく。例えば1995年に富良野市に開館した「北の国から資料館」は、最盛期には最大9万人の年間来館者数を誇ったが、徐々に来館者数は減少していき、2016年8月末に閉館してしまっている<sup>d</sup>。このように、どんなに人気を博したコンテンツであっても、いつかは人々に忘れられていき、コンテンツツーリズムを行う者も減っていく。そして、コンテンツツーリズムで賑わった観光地も観光客の減少に伴い施設を維持できず閉鎖してしまうのである。

ここで視点を北海道全域に移そう。個別の作品単位では、いつかコンテンツツーリズム現象は終わってしまう。しかし、北海道全域で見れば、過去から今日までコンスタントにコンテンツツーリズムに繋がるコンテンツが登場していることは大変興味深い。多くの場合、そうしたコンテンツには北海道で生まれ育った、あるいは北海道を訪れたことがあるクリエイターが深く関わっている。つまり、北海道に縁があるクリエイターたちを継続的に生み出し続けられれば、自ずと北海道に関わるコンテンツが生み出され、コンテンツツーリズム現象が北海道内で持続していくとも考えられる。

その時に必要となるのは、クリエイターたちの発掘と育成である。間違えてもバブル期のような大規模なリゾート開発ではない。富良野市の「北の国から資料館」のような施設は、コンテンツが人気を博してから準備するのでも遅くはないと考えられる。コンテンツツーリズムの持続可能性を考えた時に必要なのは、コンクリートではなく人への投資なのである。

---

<sup>d</sup> 「北の国から資料館」来場者減で閉館：日経ビジネスオンライン  
<http://business.nikkeibp.co.jp/atcl/interview/15/279177/040700024/>